研究課題	実家の茶の間・紫竹におけるつながりの構造要因の検討
支援番号	GC02420182
研究事業期間	平成 30 年 4 月 1 日から令和 2 年 3 月 31 日
助成金総額	340,000
研究代表者 （所属機関）	石上　和男（新潟医療福祉大学 医療経営管理学部 医療情報管理学科）
研究分担者 （所属機関）	金谷光子（新潟医療福祉大学 看護学部看護学科）、髙野晃輔（新潟医療福祉大学 医療情報管理学部 医療情報学科）、杉本洋（新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科）、西川薫・紅林祐介・大屋愛里（新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科）、遠藤和男（新潟医療福祉大学 健康科学部 健康栄養学科）、佐藤純子（元 新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科）、皆川璃子（新潟医療福祉大学 医療情報管理学部 医療情報学科）
研究キーワード	ソーシャルインクルージョン(社会的包摂)、実家の茶の間・紫竹、つながりの構造要因、助け合い・支え合いの仕組み、地域包括ケア
研究実績の概要	１．研究の目的 　新潟市における地域包括ケアシステム推進モデルハウス “実家の茶の間・紫竹”では 、他者を排除せず 、かつそれぞれのプライバシーに踏み込まない形で参加者同士の助け合いが見られる 。本研究は“実家の茶の間・紫竹“におけるつながりのあり方を通してその構造要因を明らかにすることを目的とした。 ２．研究計画・方法 (1)2018 年度 “実家の茶の間”への支援や今後の地域政策に関与しているそれぞれ所属の異なる関係機関職員 5 名およびその主宰者 2 名に対し 、半構造化インタビューをそれぞれ 60 分から 90 分に亘って実施した 。分析方法は逐語録化したインタビュー内容を１）質的記述的方法 、２）KHCoder による共起ネットワーク分析を行った 。本研究は 、新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得た（17831） 。 (2)2019 年度 “実家の茶の間・紫竹”の利用者 11 人(女性 5 人、男性 6 人、年代 60 歳～80 歳)を対象に、①参加のきっかけ②最初の印象③変化があったこと④どういう場所と感じているかの 4 項目を中心に半構造化面接を行った。インタビューは 1 人当たり 30 分～60 分を要した。 (3)データ分析の方法 テキスト文章の質的分析を行う形態素解析ソフト:KH コーダー(Coder)を用いた。 (4)　倫理的配慮　　新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得た。(承認番号 18228-190705) ３．結果(2019 年度) (1)「実家の茶の間・紫竹」の利用者 11 人(男 6 人、女 5 人)を対象として、以下の 4 項目を中心に半構造化面接を実施した。①参加のきっかけ　②最初の印象 ③変化があったこと④どういう場所と感じているか共起ネットワーク分析を用いて、各項目の特徴を抽出した。 (2)半構造化面接の項目ごとの分析

①参加のきっかけ
開設祝いの日に自治会や老人会の役員として出席した。友達と一緒に参加した。
②最初の印象
よそとまったく違う雰囲気がある。座る場所も自分の時間に合わせて出入りするのも自由。
③変化があったこと
茶の間に来ることで、気の合う友達ができ、他者との関わりの中で自分の性格も変わってきた。
集団の中で、サポーターという役割を担って活動することが楽しさや満足感につながっている。
④どういう場所と感じているか
楽しい場所。一人でいるよりみんなで一緒に食べた方が楽しい。
気を使わないところで、自由参加、自由解散、一人で来て、一人で帰ることができる場所。
⑤男女別の利用者における通う目的の特徴
〈男性〉
男性は河田さんから直接声を掛けられ、自分ができることをやろうと 決めた。茶の間で友達になるのが楽しいし、居心地が良い。 実家の茶の間・紫竹は故郷の家族で過ごした実家と同じ感覚。
〈女性〉
女性は毎日一人でいるより友達と過ごしたい。実家の茶の間・紫竹は自 由におしゃべりや好きなことができる居心地の良い、気を使わなくても良 い場所。

４．考察
“実家の茶の間・紫竹”において見られた集う人々が感じる居心地の良さは 、現代の日本における少子高齢化社会・認知症・様々な複雑な人間関係をしなやかに生きていくための重要な手立ての１つである。その中では、他者を排除せず 、かつそれぞれのプライバシーに踏み込まない形で参加者同士の助け合いが見られる。
この“実家の茶の間・紫竹”が新潟のみならず全国における他の“茶の間”や”通いの場”へと浸透していく事が望まれる 。